

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要書

論文題目

日系企業の通訳場面における

聞き手の評価意識

—聞き取りやすさを中心に—

傅 文霞

2023年 3月

本研究の目的は、中日通訳場面において、聞き取りやすさを含む、聞き手の通訳に対する全体的な評価意識を明らかにすることである。以下、本論文の流れに沿って、論文の概要を記述する。

第1章 序論

本章では、筆者の経験から問題意識に至った経緯、研究背景、研究目的と本論文の構成について述べた。

筆者が日本企業に勤め、中国語から日本語に通訳する業務に携わった際に、「聞き取りやすい通訳だ」という評価をもらったことがある。普段の業務では発音に関して厳しく言われないのに対し、会議などの場面になると「聞き取りやすさ」が求められることに筆者は気づいた。もう一つの気づきは、単に訳すことだけではなく、それ以上のことが聞き手の通訳者への評価意識に含まれているということだ。しかし、「聞き取りやすい通訳だ」という評価をもらい、意識が向くようになったものの、母語話者である聞き手が何を持って聞き取りやすいと感じ、通訳者にどのようなことを求めているのかが分からないため、筆者の中では母語話者である聞き手の評価意識に影響を与える要素を整理し、言語化することができず、次の通訳業務に活かすことができなかった。

出入国在留管理庁（2021）により、学校教育段階を経た留学生の卒業後の進路について、就職先での職務内容が「翻訳・通訳」となっている人は10,220人で最も多く、全体の20.6%を占めていることが公表された。この統計結果から、勤務内容において最も人数が多い「翻訳・通訳」について、どのような支援が急がれているのか、どのような課題が残されているのかを明らかにすることが重要であると考えられる。

支援のキーワードとして、発音の支援が挙げられる。戸田（2008）は、発音コース受講希望者1,216名を対象にアンケート調査を行った。その結果、「学習者は、発音の問題がコミュニケーションの弊害になることを実生活の中で経験していた」（p.39）ことが明らかになった。日本企業の活動の中でも、一般的なメール作成、業務報告などの活動と比べ、通訳という活動は翻訳と異なり、言葉を声に発することにより、情報を伝達する活動であるため、発音と緊密に関係している活動と言えよう。通訳における発音の影響について、三島（2007）では、以下のことを述べている。

翻訳と違い音声を媒体とする通訳では、いくら正確で適切な訳ができていても、音声

表出に不備があれば聞き手に不必要な負担を強いることになり、極端な場合、聞き手の注意が訳出の内容ではなく音声そのものに向けられ、理解を阻害することにもなりかねない。(p. 53)

また、新崎(2017)では、「違和感のない通訳文を聞きやすい声とスピードで伝えてくれる」(p. 183)ことが通訳者に求められると報告している。これらの先行研究から、通訳場面において発音は重要な役割を果たし、通訳者に求められる発音の指標の一つとして聞き取りやすさが挙げられることが分かった。

以上の問題意識と研究背景を踏まえて、本研究では、中国語から日本語に訳す業務に携わる通訳者の通訳に対し、聞き取りやすさを含む、聞き手の通訳に対する全体的な評価意識を明らかにすることを目的とする。以上の目的を達成するためには、本研究では以下の2つのリサーチクエスチョン(RQ)を設定した。

RQ1：中日通訳場面において、聞き取りやすさに影響する韻律的特徴はどのようなものか。

RQ2：中日通訳場面において、聞き手の通訳に対する評価意識に含まれる要素は何か。

第2章 先行研究

本章では、本研究に関連する先行研究を概観した上で、先行研究の問題の所在及び本研究の位置づけを述べた後に、本研究における用語を定義した。

まず、日本語教育分野において、母語話者評価に関連する研究がどのように日本語教育分野で取り上げられてきたのかを整理した。次に、発音の韻律的特徴と評価・聴覚印象に関する先行研究をまとめ、発話速度、声の高低、リズム、ポーズそれぞれがどの場面においてどのような評価につながるのかを示した。そして、聞き取りやすさに着目した研究及び通訳場面に対する評価に着目した研究を概説した。

本研究の位置づけについて、日本と中国の経済的に切り離せない関係から、中日通訳場面を考察する必要性が高い。そして、音声にとどまらず、通訳者に対する聞き手の全体的な評価意識まで広めて考察する必要性があると考えられるが、それに関連する研究は少ない。そこで、本研究は、中日通訳場面に着目し、聞き手の通訳に対する全体的な評価意識を明らかにする。

最後に、本論文における「中日通訳場面」などの用語を定義した。

第 3 章 調査方法

本章では、調査の概要について述べた。本研究の調査協力者は日系企業に勤めており、普段業務の一部として中日通訳業務を担当する中国人職員 2 名及び日系企業に勤めており、普段中日通訳場面を月に 1 回以上している日本人職員 2 名である。研究対象に対し、事前アンケート調査、母語話者評価とインタビュー調査を実施した。

事前アンケートに記入してもらった後、聞き手と通訳者、筆者に加え、計 3 名でビジネス場面の中日通訳のロールプレイを 2 回実施し、「内容への理解度」及び「聞き取りやすさ」という 2 つの観点から評価してもらった。母語話者評価調査後、聞き手のみを対象に、なぜそのような評価をつけたのか、評価をする際のポイントは何かなど、事前アンケートの内容及び発音評価シートに記入した内容を中心に、半構造化インタビューを実施した。

インタビューデータを SCAT で分析し、聞き手 J-1 と J-2 のそれぞれのストーリーラインを立て、理論記述を試みた。

第 4 章 分析結果及び考察

本章では、第 3 章で得られたデータを分析した結果を聞き手ごとに分けて、それぞれのインタビューデータに照らし合わせながら、具体的に考察した。

まず、聞き取りやすさに影響する韻律的特徴について、J-1 の語りから、聞き取りやすさには複数の要素が関連し、影響を与えているほかに、発音の特徴により聴覚印象が変わり、発音速度や語尾のような注意すべき点が存在することが明らかになった。J-2 の語りから、聞き取りやすさに影響する韻律的特徴について、心理的な要素が話速に反映される可能性があることが分かった。そのほかに、アクセントにより意味が変わる単語に関しては自然なアクセントが求められること、方言的な特徴が入った発音が聞き取りやすさにマイナスに働くことが分かった。

そして、通訳に対する評価意識に含まれる要素において、「発音に対する評価意識」、「内容に対する評価意識」、「通訳者の役割に対する評価意識」の 3 点から、J-1 と J-2 の意識を考察した。最後に、J-1 と J-2 に共通して見えた「通訳者に対する配慮」について考察した。

第 5 章 総合的考察

本章では、第 4 章で得た分析結果に基づき、総合的に考察した。

まず、発話速度、ポーズ、アクセントが聞き取りやすさに影響していることが明らかにな

った。発話速度に関しては、遅い発音が聞き取りやすさにプラスに働くことが分かった。特に、数字を速く発音すると、聞き取りにくい印象につながるため、ゆっくりとした発話速度が求められることが示唆された。ポーズに関して、ポーズの置く場所が聞き取りやすさに影響しており、ポーズが長すぎると、前後の文の関係性が希薄化するため、ポーズが長くならないように心掛ける必要性があることが示唆された。アクセントに関して、複合語のアクセント核の位置移動により、意味を正確に理解できていない可能性があることが明らかになった。そして、ビジネス場面においても、発音が同じでアクセントが異なる単語の場合は、特に注意する必要性があることが示唆された。

次に、他言語及び方言が聞き取りやすさに影響していることが明らかになった。英語のような外来語の発音は特に聞き取りにくいいため、英語からの影響を強く受けている中国人日本語学習者の場合、中日通訳場面において外来語の発音に意識を向けさせる必要性が示唆された。そして、方言的な特徴が発音に入っている通訳者が存在し、そのような方言的な特徴が入った発音は東京方言話者にとって聞き取りにくいことが明らかになった。そのため、方言的な特徴を持ち、干渉を強く受けている学習者または通訳者に、中日通訳場面において発音を意識させる必要性が示された。

最後に、韻律的特徴は聞き取りやすさに影響するほかに、聴覚印象にも影響を与えていることが分かった。発話速度が加速的に速くなる場合は、通訳者が焦っている印象をもたらし、聞き手も焦らせる可能性があることが明らかになり、はっきりと発音しない語尾が聞き手に対して自信のない印象につながるということが明らかになった。

通訳に対する評価意識に含まれる要素として、「発音に対する評価意識」、「内容に対する評価意識」、「通訳者の役割に対する評価意識」の3点を考察できた。

(1)「発音に対する評価意識」には、「発音により誤解した経験の有無」、「接触頻度による影響」、「通訳者の発音を聞き取ろうとする姿勢」が影響している可能性があることが分かった。

(2)「内容に対する評価意識」では、「文法的な要素」と「発話内容の忠実度」が影響していることが分かった。

(3)「通訳者の役割に対する評価意識」では、単なる情報の伝達者以外に、「聞き手の不安を解消する役割」、「会話を円滑にする調整役の役割」、「仲間としての役割」、「意見や見解を述べる役割」、「感情的な部分を把握する役割」があることが分かった。

次に、日本語教育分野への示唆として、「将来両言語間の通訳者として従事したい学習者

への発音指導の手掛かりとなる可能性」と「現役の通訳者向けの参考資料として用いる可能性」の2つの点があると考えられる。

第6章 まとめ

本章では、本研究の RQ に対する答えについて述べ、研究の意義と今後の課題について述べる。

まず、RQ1 の回答は、中日通訳場面において、聞き取りやすさに影響する韻律的特徴は単独なものではなく、様々な要素が影響を与えている。RQ2 の回答は、中日通訳場面において、聞き手が通訳に対する評価意識に、「発音に対する評価意識」、「内容に対する評価意識」「通訳者の役割に対する評価意識」が含まれている。

次に、本研究の意義として、以下の3点を述べた。(1) 聞き取りやすさに影響する発音の韻律的特徴があることを確認できたことで、将来両言語間の通訳者として従事したい学習者を対象とする発音指導の手掛かりとなる可能性がある。(2) 聞き手の評価意識に特徴があることを確認できたことで、通訳者に新たな気づきを促してくれるきっかけになると同時に、誤解される、低く評価されることにより活躍する機会を喪失するようなことを回避できる。

(3) 実際に通訳現場を経験している聞き手の意識を聞いたことで、日本語学習者向けの通訳者養成において通訳を学習する際、さらには現役の通訳者が自己調整をする際に、参考になる事例として提示する。

最後に、通訳者が聞き手にどのようなことを求めているのかという通訳者の意識及び聞き手の評価意識の変容を明らかにすることを今後の課題としたい。

参考文献

出入国在留管理庁 (2021) 「令和2年における留学生の日本企業等への就職状況について」

(最終閲覧日：2022年6月14日)

〈<https://www.moj.go.jp/isa/content/001358473.pdf>〉

新崎隆子 (2017) 『『聞き手』の視点から見た同時通訳と逐次通訳』『通訳翻訳研究』17巻, pp. 167-186

戸田貴子 (2008) 『日本語教育と音声』くろしお出版

三島篤志 (2007) 「日英放送通訳者の英語に見られる音声学的特徴について」『人間文化学部研究年報』9, pp. 53-67